高専学生の英語嫌い減少と実践的英語力向上をめざして
--アクション・リサーチと共により効果的な指導法を探る--

水野 知津子*

Searching for More Effective Ways to Improve Kosen Students' English Ability and Negative Attitudes toward English Learning Based on Action Research

Chizuko MIZUNO.

ABSTRACT

This paper shows attempts to improve students' English ability, communication skills and negative attitudes toward English learning at the National Institute of Technology, Akashi College. Action research is effective since it is teacher-initiated classroom investigation and seeks to increase the teachers' understanding of classroom teaching and learning for change in classroom practice. This cycle has helped to lead the author to better directions.

KEY WORDS: action research, motivation, collaborative learning, reflection, extensive reading

１．はじめに

グローバル化した世界においては、実践的英語力を持ち、異文化を理解し、自分の意見を堂々と主張できる事が不可欠であり、エンジニアの分野でも例外ではない。また、良い人間関係を築きながら意見を交換し、求められる商品を開発、提供するにはコミュニケーション能力が非常に重要である。多くの工学系学生は英語に苦手意識を持っており、英語教育は大きな課題となっている（西澤・吉岡・伊藤, 2010）。恥ずかしがり屋の多い工学系学生の苦手意識を減少し、実践的英語力とコミュニケーション能力を同時に育成することができれば理想的である。有益な方法は何だろうか。

言語はコミュニケーションの手段であり、他者との関わりの中で育まれる。社会文化的理論では、学習者個人の言語知識の発達の源泉が、他者へのやりとりの中にあるとされ、近年、英語授業や第二言語習得研究中にあるとされ、近年、英語授業や第二言語習得研究においてペアワークへの関心が高まっている（吉田, 2017）。時代の変化のなかで生徒が変わった。ベテラン教師でさえ経験や従来の理論だけでは乗り切れない問題に直面する時代になり、英語授業観の転換が起こっている。従来の「情報伝達型」の典型である「文法訳読式」授業から、新しい「協同作業型」への転換が求められている。この二つを組み合わせた指導方法が必要であり、アクション・リサーチが注目されている(佐野、2004)。英語苦手減少、実践的英語力とコミュニケーション能力向上に有益な指導法を探るため明石高専での取り組みを振り返りながら考察したい。

２．アクション・リサーチ

佐野（2004, p. 31）はアクション・リサーチを「新しい英語授業研究」という副題を付け、「教師が授業を進めながら、生徒や同僚の力も借りて、自分の授業への省察とそれに基づく実践を繰り返すことによって、

*一般科目（英語）

次第に授業を改善していく授業研究である」と説明している。アクション・リサーチは授業研究の立場、教育改革運動の立場、理論検証の立場の３種類に大別できる。アクション・リサーチは、理論や経験からヒントを得て実践し、その実践の結果を客観的な視点で考察して、得られた知見を次の実践に移す Reflective Teaching と非常に類似した教育観を持っている。この立場からのアクション・リサーチが最も実行しやすく、現在の主流となっている。生徒中心の発想や体験を重視した教育観が根底にある。体験重視の教育実践とそのための授業研究の必要性を提唱したのは 20 世紀初頭のアメリカの教育学者 Dewey である。教育に役立ってこそ「教育の科学」であり、実践に基づく判断こそがそれを決定することを強調している。

アクション・リサーチの具体的な方法は、直面する問題を明らかにし、生徒や教師の実態を把握した上で対応策を考える。一定期間実施したら、変化の様子を観察やアンケート、テストで調査し、結果を分析する。結果が満足するものでなければ再度問題点を調査して対策を考える、というサイクルで行われる（佐野, 2004)。アクション・リサーチと共に取り組みを行ってきた。改善への対応を探るため明石高専の現状と実践を振り返る。

３．高専学生の英語力と傾向

現実の教室で英語嫌い減少と英語力・コミュニケーション能力向上を実現するためには、高専学生の英語力や傾向を理解する必要がある。高専学生の英語力（TOEIC スコア）は学校別でみると最も低くなっている（図１)。高校より低い。高専本科５年間の英語力を

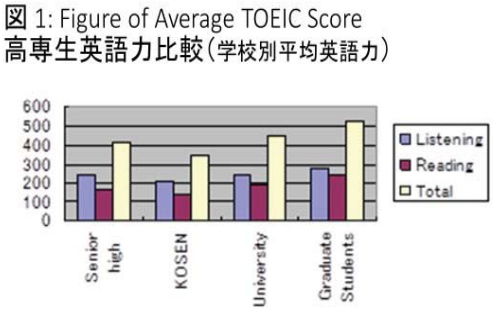

図１　高専生英語力（学校別平均スコア比較）

見ると、１年が最も高く、２年生から下がり始め、３年生で急激に低くなり、４年生から徐々に回復する傾向がある（図２)。TOEIC の 2014 年スコアでは、１年生 373、２年生 370、と下がり、３年生では最も低い 332 となっている。４年生では 337、５年生で回復して 369 になっている。高校に比べて少ない英語授業数や高専特有の理系科目の多さ、実験で時間を取られるなどが理由として考えられる。

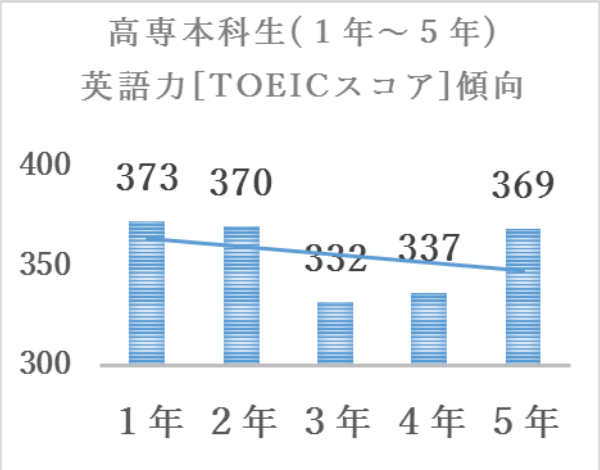

図２　高専生学年別英語力比較

４．明石高専学生の現状

４・１ 英語力

筆者は 2017 年４月から明石高専で指導を始めた。学校別、高専生一般との比較のため図２と表１を参照する。明石高専学生の TOEIC IP スコアは 2010 年が 408（４年生 139 名)、2014 年は 452（５年生 146 名）である。表１の高専生平均スコア 349、図２の高専４年生 337 と５年生 369 を比較すると明石高専学生のスコアが高いことがわかる。

表１　明石高専学生英語力理解のための資料

高専生の英語力比較

- 表 1: Average TOEIC Score
- ----------
- Senior high school　410(Listening 241+Reading169)
- KOSEN　349(Listening 208+Reading141)
- University　445(Listening 249+Reading196)
- Graduate students　524(Listening282+Reading242)
- ----------
- Uguisukyou. (2014). 学年別TOEIC平均スコア http://uguisu.skr.jp/toeic/school_score.html, retrieved on March 5, 2014.

４・２ 協働学習への態度

筆者の授業では、「共同作業型」、協働学習としてペアワークを多く取り入れてきた。他者と英語で活動することでコミュニケーションの楽しさを実感し、コミュニケーションすることへの抵抗が減り、英語嫌い減少に効果があると今までの経験で感じたからである。

2017 年度に協働学習に関するアンケート結果を実施した。

2017 年４月最初の授業でのアンケートには、「ペア・グループで勉強するのが好きだ。」と、「ひとりで勉強すると学習がはかどる。」という質問を含めた。回答は１）あてはまる、２）まあまああてはまる、３）あまりあてはまらない、４）あてはまらない、の４項択一でたずねた。文系である「経済・経営学部の英語の習熟度の低い大学生を対象にした英語学習に対するニーズ調査」結果（カイレラ松崎、2015）と比較した（図３,図４）。「ペア・グループで勉強するのが好きだ」の結果に大きな差が見られた（図３）。

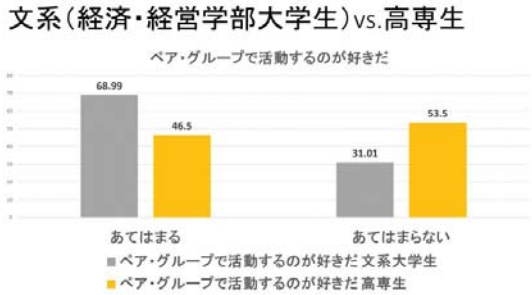

図３　ペア・グループ活動に対する態度比較

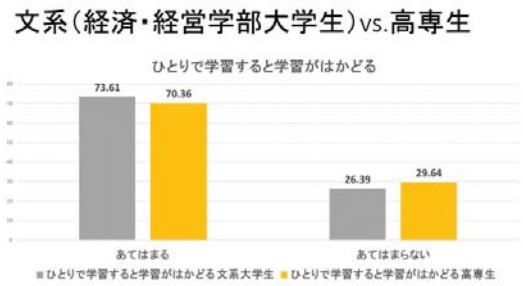

図４　ひとりで学習することへの態度比較

文系大学生（269 名）のペア・グループ活動への肯定的態度が 68.99%に対して明石高専生（262 名）は 46.5%であった。否定的態度は明石高専生は 53.5%に対して文系大学生は 31.01%と大きな差が出た。

４・３ 英語への態度

2017 年と 2018 年４月の１回目の授業でアンケートを行った。対象は 2017 年が２年生 171 名、５年生Ｅ科とＭ科の 85 名、2018 年は１年生 171 名である。いずれもすべて筆者が指導するのは初めての学生である。英語への態度調査では、「英語は好きですか」という質問に対して１）好き、２）どちらかというと好き、３）好きでない、４）どちらかというと好きでない、の４項択一とした。その結果が図５である。

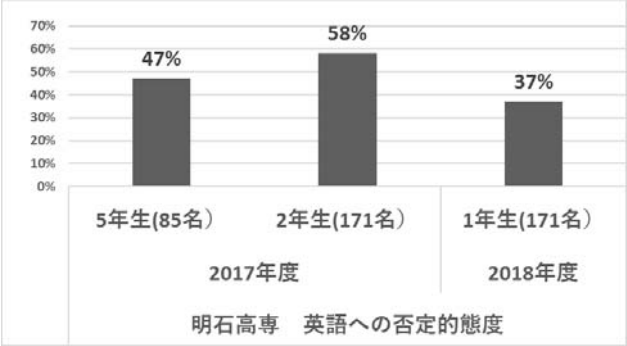

図５　明石高専生の英語への否定的態度

2017 年度学生の英語への否定的態度は５年生が 47%、２年生は 58%であった。2018 年度の１年生は 37%と、英語嫌いが少なくなっている。

５．実践結果及び考察

明石高専では前任校での実践に加え、できるだけグループ学習を取り入れた。前任高専生の英語力は高専平均より低く、明石高専と比較するとかなりの差があった。実践前の前任高専生の英語への否定的態度は 2013 年度が 43%、2014 年度は 45%、2015 年度は 53%と英語嫌いが多かった。対象学生は全員筆者にとって指導するのがはじめての学生である。実践後は英語への肯定的態度が増え、英語力の向上が見られた（水野、2018）。

５・１ 実践と結果

2017 年の実践では、４月最初の授業と６月中間考査の試験返却時に英語力調査試験を実施した。５年生は英検２級の筆記試験を本来の 75 分を短縮した 50 分で解答してもらった。２年生には英語検定準２級のリスニング試験を実施した。結果は表２の通りである。

表２　明石高専での実践結果（2017 年度）

2017年度の結果

1)5年生：英検2級筆記試験は45点満点

↓

T検定の結果p<0.05で有意差有り。効果があったと考えられる。

平均点 pre-　post-

25.2　30.6

受験者87名中62名が1点以上得点を伸ばした。25名の学生が10点以上得点を伸ばした。22点伸ばした学生もいた。平均では5点得点が伸びていた。

2)2年生：準2級は30点満点

↓

有意差なし。171名中82名が1点以上得点を伸ばした。伸びた得点の平均は1点未満である。

５年生は統計的に有意差が出た。45 点満点で平均点は５点伸びた。２年生では有意差はでなかった。下がってはいないが、伸びた得点の平均は１点未満であった。別のタイプのアンケートを実施したため、実践後の英語への態度調査は実施できなかった。

５・２結果と考察

2017 年度では実践後５年生で英語力が大きく伸び、有意差が出た。しかし、２年生では下がりはしなかったものの、ほとんど差はでなかった。２年生の英語への否定的態度が 58%と大きいことが理由のひとつかもしれない。

５年生は難関大学入試用の長文読解の授業であった。編入学試験で熱心な学生が多いこともあるが、グループ活動にも積極的で、内容理解後のシャドウイング等様々な音読活動のペアワークにも前向きに取り組んでくれた。

２年生では高校検定教科書を使用した読解の授業であった。難しい文法事項や表現、構文などを含む英文は丁寧に解説をし、音読後暗誦する活動を行った。できるだけ英語で話しかけ、ディクテーションや多様な音読、プレゼンを取り入れた。クラスによるが、ペアワークを嫌がった学生が複数見られた。全体的に反応は良くなかった。全文訳を好み、詳細な解説を望む学生が多いようであった。内容理解後は教科書を使って様々な活動をしたかった。しかし、一部の学生からグループ活動は実施しないよう強い要望があり、受け入れざるを得なかった。結果として中途半端な授業になってしまった。どこに問題があったのだろうか。

５・３ 問題点調査

2018 年度は１年生を担当している。文法クラスである。DataBase 単語帳と大学入試用として NextStage 英文法・語法問題集が加わる。前年度の反省から日本語を多めに使用している。しかし、基本的な指導方針は前年度とほぼ同じである。ディクテーションや、音読活動など多くのペアワークを取り入れた。学生の反応は大変良く、前年度とは大きく異なった。文法解説では退屈そうにする学生がいるものの、ペア活動はどのクラスでも積極的に参加してくれた。この理由を調べてみた。

５・４問題点調査結果と考察

2017 年度と 2018 年度では学生の指導法に対する好みに大きな違いがあるように感じた。2017 年度では翻訳を好む学生が多く、2018 年度ではペアワークなどのコミュニケーション活動への抵抗が少ない。2017 年度では翻訳に対する態度、2018 年度では過去に受けた授業で好きな指導法について尋ねた。いずれも４月に実施した筆者の授業実践前のアンケート結果である。

2017 年度は「翻訳の練習はためになる」に対して回答は１）あてはまる、２）まあまああてはまる、３）あまりあてはまらない、４）あてはまらない、の４項択一である。2018 年度は「過去の英語学習でよかったと思う英語授業はどのようなものですか」の質問で、１）文法訳読、２）リスニングやコミュニケーション活動中心の授業、３）速読や読解授業、４）書く授業、５）その他で、自由に書いてもらった。複数回答である。結果は図６と図７である。

結果1：英語学習と文法訳読式（翻訳練習）への態度比較

	2017年度5年生	2017年度2年生	2018年度1年生
英語への否定的態度	47%	58%	37%
翻訳への肯定的態度	87%	80%	

図６　翻訳への肯定的態度（2017 年度）

結果2：2018年度1年生：過去良かった指導法(%)

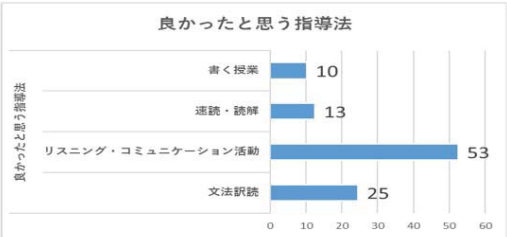

図７　過去良かった英語指導法（2018 年度）

「翻訳」への肯定的態度は５年生が 87%、２年生は 80%と非常に高い数字であった。2018 年度の１年生では、質問や回答方法が異なるため単純には比較できないが、「文法訳読」は 25%で、２番目に多かった。しかし、１番多かった「リスニング・コミュニケーション活動」は 53%であり、１位と２位の間には大きな差がある。今までに受けた授業の指導法を好む傾向が見られ、学生の授業態度の差がある程度納得できた。

６．今後に向けて

明石高専での実践を振り返りながらより効果的な指導法を探してきた。現状を把握し、問題点をみつけて改善することが必要である。2017 年度の２年生と 2018

年度の１年生の授業実践前と後の英語力に差はなかったが、高専生独特の傾向である、１年生から下降はじめ、３年生で大きく下がる傾向はなんとか防止できているのかもしれない。翻訳を好む傾向については、大学編入学試験問題に多くの翻訳問題が出題されてきた影響を感じる。入試の影響は大きい。しかし、大学入試対応と実践的英語力育成の両立を可能にする指導法がある（鈴木、2016）。10 分間でも授業内多読の効果が示されている。多読の実施方法なども検討したい。やる気のある１年生の英語への態度や英語力を維持し、さらに力をつけられるように取り組みを続けたい。

参考文献

1) カイレラ松崎順子：“経済・経営学部の英語の習熟度の低い大学生を対象にした英語学習に対するニーズ”、Language Education & Technology、第 52 号、179-203 項 (2015).
2) 水野知津子：“英語苦手・多忙高専生の英語力をいかに向上させるか--英語嫌い減少・英語力向上への取り組みから--“、明石工業高等専門学校紀要、第 60 号、36-40 頁 (2018).
3) 水野知津子：“英語苦手意識改善と英語授業改善に向けての取り組み-高専学生の英語学習に対するビリーフ理解からの考察—“、外国語教育メディア学学会会 (LET)　第 58 回（2018 年度）全国研究大会発表資料 (2018).
4) 西澤一、吉岡貴芳、伊藤和晃：“工学系学生の苦手意識を克服し自立学習へ導く英語多読授業”、工学教育、第58-3、12-17項 (2010).
5) Richards, J. & C. Lockhart: “Reflective Teaching in Second Language Classroom”, (Cambridge: CUP., 1994).
6) 佐野正之：「アクション・リサーチのすすめ」、大修館書店 (2004).
7) 鈴木寿一：“これで良いのか入試対策授業”、外国語教育メディア学会関西支部中学高校授業研究部会、英語の教え方研究会、より良い英語教育を考える会共催　第 22 回中学高校教員のための英語教育セミナー発表資料、(2016).
8) 高瀬敦子：“What is Extensive Reading? Needs of ER, ER Materials, Effective Ways to Succeed ER (多読の必要性・多読図書・効果的多読方法)”、関西多読セミナー発表資料 (2015).
9) Uguisukyou : 2014 年 3 月 5 日検索 http://uguisu.skr.jp/toeic/school_score.html.
10) 吉田達弘：”英語授業におけるペアワークの実践と研究”、KELES ジャーナル（関西英語教育学会）、Vol.2、6-10 項、(2017).